

#アンプ de GO!! with Marshall

プロ・ギタリスト11人の音で体感したい“リアル・アンプ・サウンド”

昨今の目覚ましい技術の進歩によって音楽を楽しむ環境が激変し、もっぱらスマホやPCからヘッドフォンを通じて音を聴くことが主流になった…。では、エレキギターも同じくヘッドフォンでサウンドメイクする時代に突入したのか？ 否！ 本物のアンプに繋いで空気から伝わってくるギター・サウンドは、今もなお僕らの心を昂ぶらせ、その魅力はギタリストたちを虜にし続けているのだ!! それを実証するため、今回は豪華11人ものプロ・ギタリストたちに協力を仰ぎ、読者諸君にも身近なマーシャルの自宅練習用小型アンプ：MG15Rを使って、どれほど多彩な音と無限の可能性が“アンプという機材”に秘められているのかを実験してみた。加えて、GiGS YouTubeチャンネル[youtube.com/user/GiGSmagazine]には、実際に彼らがサウンドメイクしている様子をあえてスマホで撮影してアップロード。一体どんな音が創り出されたのかを動画で確かめながら、本特集に綴られている彼らの言葉を熟読し、今度はキミ自身のギターをアンプに繋いで鳴らしてみてくれ!!!



アンプまでが楽器というか、音作りも込みで演奏になる

Case-01

亀本寛貴
[GLIM SPANKY]

「歪みの具合に関して言うと、下の写真くらいの歪みならソロも弾けるし、ギターのパリュームを絞ればクランチもいける。そのぐらいの加減しておくのが好きなんです。コードなんかを弾く場合でも、今回ぐらいの歪みにしておいてボリュームを絞るっていう風にした方が、ギターの実験力アップに繋がると思うので、こういった音作りをしていることが多いです。

僕は家でも同じような音で弾いているので、やっぱり練習でもアンプで鳴らす方が好きですね。生音で練習しても運指の確認以外は意味を成さないというか…。やっぱりミュートがちゃんとできているのか分からないから、いざアンプで鳴らしてみたら音がガシャガシャしちゃったりして。それで練習し直すよりも、実際に演奏する音で練習の方が効率はいいですよ。

それにエレキギターって、フレーズとかピッキングの強さやニュアンス、そういったものが全部音作りによって決まると思うんです。アコースティック・ギターと違ってアンプまで

が楽器というか、音作りも込みで演奏にならないですか。だから、コード進行とか押さえる場所の確認だったら生音でもいいですけど、ちゃんと練習するときはアンプに繋がないと意味がないかなと思います。

初めてアンプで音を出したときのことは11年くらい前なのであんまり覚えてないんですけど(笑)、とにかく“音がデカいな！”って思った感覚があります。あと、思ったほど音のコントロールが効かなくて、音がグシャグシャになってしまっすぎて難しいなと感じた記憶もありますね。アンプで音を出すのが気持ちいいと感じ始めたのは、その後スタジオに入って、より大きなアンプを使ったときでした。

1つ言えるのは、結局小さなアンプで弾こうが大きな真空管アンプで弾こうが、上手い人は上手いってこと。実際このアンプで上手く弾ければ大きなアンプでも弾けるし、どちらにしても必要な技術は変わらないと思います。だからアンプで練習することは大事ですよ」(亀本)



▲「僕のセッティングは、マーシャルだと基本的にミドル=10からスタート。そこから他の帯域でバランスを取っていく感じで音作りをしています。あまりトレブルは上げない主義なんですけど、今回はフロント・ピックアップも使ったので少し上げてみました。そうするとミドルを少し下げた方が音もスッキリするかなと思ったのでちょっと削って…。あとは気分というか、“トレブル上げたからベースも上げとけ！”っていう感じです(笑)」(亀本)



自分の音に対する意識が広がる場所は、アンプで鳴らしてこそ

Case-02

若井滉斗
[Mrs. GREEN APPLE]

「マーシャルのアンプは、分かりやすく“ロック”っていう感じがしますよね。その“ロックな音”が出せるっていうのがマーシャルを使う上で一番の醍醐味だと思います。それから手もとのコントロールにも音がちゃんと付いてきてくれるので、そういう部分で自分のギターの実験がしやすいアンプだと感じています。

僕にとって最初にギターを繋いだアンプは兄が持っていたマーシャルで、まさに今回のようなアンプだったんです。初めて鳴らしたときは夏休みで、親が家にいないときを見計らって思いっきり鳴らしたんですけど(笑)、その瞬間にすべてが広がったような感じがしました。あのときの感動は今でも覚えています。

弾くときの環境によっては、ヘッドフォンを繋いで、その音を聴きながら弾くっていう場合もあると思いますが、ヘッドフォンで聴く音って何ていうかすごく狭い自分の中の世界みたいなものでしかないかなと思うんです。でも直接スピーカーから出す音には、それよりも

広がりがあると思っているんですよ。やっぱりこういう風にスピーカーでアンプを鳴らすと、音をいろんなところに飛ばせるじゃないですか。それで、その中には“誰かに聴かれてるんじゃないか”という感覚が伴っていたりもするんです。自分の音に対する意識っていう部分が広がるところは、アンプで鳴らしてこそそのポイントなんじゃないかなと思います。

だから練習をするにしても、できるだけそういう風にアンプのスピーカーから音を出すようにした方がいいと思っていますね。それに、やっぱりライブってアンプを鳴らして演奏するものじゃないですか。普段からそういう状況で鳴らして練習していた方が、本番と同じような感覚に慣れていけるというか、“見られる意識”みたいなものも身に付くのかなと思います。だから自分が練習するときも、やっぱりスタジオでアンプを鳴らすようにしているんです。バンドの中でギターを弾くなら、そういった意味でもアンプは重要だと思います」(若井)



▲「少し歪ませているんですが、あまりゲインを上げすぎないのは音が潰れないようにするため。僕はリード・ギターなので、どのポジションでプレイしていても音が抜けていくなようなセッティングを意識しているんです。あと、EQについてはベースが12時、ミドルを12時から少し上げていて、トレブルは絞っています。手もとの音色を調節できるのがポイントで、コードでも弾き方によって優しい雰囲気が出るし、元気な雰囲気も出せるような音にしました」(若井)



スピーカーから空気を通して耳で
受け取る音圧感はすごく気持ちいい

03
Case-

知 【サイダーガール】

「初めてアンプで音を鳴らしたのは中学2年生のとき。ギターとアンプがセットで売っているものを手に入れたんですけど、ちょうど今回のアンプくらいの大きさで。それを自分の部屋で鳴らしたときはロック・スターみたいな気分になりましたね(笑)。実家が田舎だったので、怒られもせずずっと爆音で弾いていました。」

練習するにしても、やっぱりアンプで鳴らすことが大事だと思います。自分のギターがどんな風に背中へ伝わってくるかっていうのを感じられるのはアンプじゃないとできないことだし、実際にエレキギターでどんな音が出せるのかを体感できるのもアンプですから。

今家で練習するときはパソコンに入っているアンプ・シミュレーターを使ってるんですけど、やっぱり少し物足りないです(笑)。結局スタジオでアンプを通して弾いているときが一番楽しいですね。空気が揺れる感じというか、音圧感というか、そういう部分がないと物足りないなって感じるから、僕はやっぱりアナログのアンプ

を使い続けたいなとすごく思います。アンプに勝るものはないというか、今このアンプが家にあったら絶対アンプ・シミュレーターじゃなくてこっちを弾くだろうし、やっぱりスピーカーから空気を通して耳で受け取る音圧感はすごく気持ちいいものだと思う。

僕はバンドをやる前からDTMをやっていたんですが、その反動もあってアンプを使いたいっていう気持ちもすごくありますね。メンバーもみんなDTMをしているんですけど、うちのボーカルも「あのアンプが欲しい!」って言ってたりして、アンプを通して鳴らすことに対してすごく興味を持ってるとですよ。パソコン内で完結できるからこそ実際に憧れているところがあるんです。もともとDTMをやっていたけどバンドがやりたくて今に至るので、こういったアンプとかアナログのものには今でも憧れがあります。そういう意味だと、やっぱりエレキギターを始める原体験はアンプを鳴らすことであって欲しいと思いますね(知)



▲「どうい音かするアンプなのかを確認するために、まずはEQをフラットにして、それで良い音が出ていたので最終的にはそのままにしました。歪みは、低音弦をブリッジ・ミュートしたときにズンズン鳴っているのが自動的に気持ちいいポイントになるので、そこに合わせて調整しています。リバーブは薄く掛けてある程度ですけど、どの程度の効きなのか試してみたら判断しましたね。アンプの個性を知るために各ツマミのピークを試すのは大切なことです(知)



アンプは自分の練習そのものを
よりカッコいいものにできる

04
Case-

すう 【SILENT SIREN】

「アンプで初めて音を鳴らしたときのことはめちゃくちゃ覚えてます! 初め買ったギターのセットには本当に小さいアンプしか付いてなくて、それは音が出るか出ないかみたいな感じのもだったんですよ。だから、初めてスタジオに入ってもっと大きなアンプに挿したとき、比べものにならないような音がパーン!って出たのがめちゃくちゃカッコ良くて。それだけですごく上手くなれた気持ちになって、「うわっ、バンドマンじゃん」って思えたのが感動的でした。だから、「大きい音ってカッコいいな」っていうところから始めたんですよ。そこから、ゲインを上げるとこゝろ歪むんだとか、トレブルを上げるとシャリッとした感じになるんだとか、そういうことがちょっとずつ分かってきてもっと楽しくなりました。」

家とかで弾いているとき、生音でもギターの音自体は結構聴こえたりするんですけど、やっぱり気持ち的にノレない部分があるとか…。アンプから音が出ると、その分感情が高まっ

てちゃんと曲に入り込めるっていう部分はあると思いますね。そういう感覚で家でもちゃんと練習して、それをスタジオやライブで再現できるようにするっていう流れです。だから、ライブでの演奏以前に自分の練習そのものをよりカッコいいものにできるのが、こういうアンプだったりすると思います。そういう部分では音作りってすごく大事で、音としてカッコいいとか、自分に合った音っていうものを研究するのは、練習するときの気持ちに関係してくるので大切なところかなと思います。

それと、私はギター／ボーカルなのでギターを持ってないとリズムが取りづらかったりもするんですよ。その点では音を背中で感じられる方が好きなんです。逆じゃないとすごく不安。最近は歌もちゃんと聴こえながら歌えるように、ライブではステージ袖にアンプを置くようにしてるんですけど、アンプでギターを鳴らすことにはそういう側面もあるので、やっぱりギターを弾く上でアンプは重要なものですね(すう)



▲「結構歪ませているけどちゃんと粒立ちがあるというか、音が一音一音聴こえるぐらいのギリギリの歪みにセットしました。SILENT SIRENの曲ではコードをガツリ強くので、コード感がちゃんと分かるような音作りをしているんです。それから、あんまりベースを上げると音がマスキングされちゃうのでほどほどに。今回はフラットな設定から少しベースとミドルを下げ、ジャズマスターのジャキッとした音を出せるようなセッティングにしました(すう)



日頃からアンプが近くにある生活も
ギタリストとしてはオススメ

05
Case

アオキテツ [a flood of circle]

「アンプから最初に音を出したのは、18～19歳くらいのときですかね。当時自分の家にはアンプがなかったので、すぐに街のスタジオに行ったんです。で、マーシャルのアンプに挿して、いきなりガー！って鳴らしました。バンド・メンバーと一緒に入るとかじゃなくて1人で鳴らしに行ったんですけど、思い切りボリュームを上げた瞬間、なんか…脳ミンから汁がいっぱい出た感じ(笑)。

アンプで練習するのはすげえ大事だと思いますよ。音の感じが単純に気持ち良いっていうのももちろんあるんですけど、アンプが自分のプレイにオマケしてくれる部分とそうじゃない部分に分かるんで。オマケしてくれる部分っていうのは、歪ませたら音が伸びるとか、自分のギターが結構イケてると思わせてくれるところ。逆にオマケしてくれない部分っていうのは、いらぬ音が鳴っちゃってるのも全部聴こえることとか、生音じゃ気付かなかった粗もちゃんと出してくれるってところですね。

今は家でもアンプを使って練習してますよ。あんまり大きいアンプじゃないけど、ちゃんとアンプから音を出すようにしてますね。あと、そのアンプには外部入力端子も付いてるんで、普通にオーディオ・スピーカーとしても使えます。そういう風に、普段からアンプが近くにある生活っていうのもオススメです。スピーカーとしていつもアンプが置いてあれば“ギターを弾こう”って思ったときにそこまで面倒な準備はいらないし、すぐにアンプに繋いで練習することもできるんで。

初心者の方はそれこそ真空管のアンプの電源を入れる手順とかからして分からなかったりもすると思うんで、そういう部分は知識を入れておくと良いかもしれません。自分も最初に鳴らしたのはマーシャルの真空管アンプだったんですけど、雑誌をメッチャ熟読してから行ったんで(笑)。あとはできるだけ音量を上げて思い切り鳴らすことと、それを楽しむことくらいになって思います(テツ)



▲「だいたいいつもベースとミドルを1時からにして、トレブルは0から始めてます。今回ミドルを高めにしているのは、マーシャルのミドルってハイも一緒に付いてくる印象があるので、トレブルを足すよりも先にミドルを足すことでギター“ギャリッ！”ってところを出そうとしたからです。で、耳に痛いところはトレブルで絞っています。リバーブを薄く掛けたのは…せっかく付いてるし、ちょっと上げとこうかなっていう感じ(笑)。(テツ)



小型のアンプであっても
直接イジるっていうことは大事

06
Case

細川大介 [LACCO TOWER]

「初めてのアンプは歪まないタイプだったんですけど、それでも大きな音が出てきたときはあまりにも嬉しくてずっと弾いていた記憶があります。アンプで鳴らしてこそエレキギターの音だと感じました。

僕は、ぶっちゃけアンプに挿さないと練習しないんですよ。ホテルなんかに行くときも必ず持って行って、小さなものでもアンプに繋ぎながら練習する。なぜかと言えば、例えば1つの弦を弾いても、何もしないと他の弦が共振して鳴ってしまうんですよ。これを右手でミュートする癖を弾きながら付けていかないといけないのに、生音でやっているとどうしてもノイズに対する意識が低くなってしまいます。あとはダイナミクスの幅が見えるのもポイントで、例えば「クリーン・チャンネルを大きい音量に設定しておいて、弱い弾き方から強い弾き方までクレッシェンドしていく」というような練習だと、最初の一番弱い音がアンプじゃなければ確認できない。生音だとほとんど聴こえないんで

すよ。ここに気を付けないと演奏するときのダイナミクスを下げってしまう原因になってしまいます。そういう意味でも絶対アンプに繋いで練習した方がいいですね。特に最近のアンプは非常に多機能なので、そんな恵まれた機材を練習に使わないのはもったいないと思います。

最近だとPC上でギターを弾く人も多いと思いますが、こういった小型のアンプであっても直接イジるっていうことは大事だと思います。というのも、PC上の音ってとても使いやすいんですよ。でも実機だと、例えばベースの調整が上手くいかないなんてことがよくある。それに対して、バンドの中だとスピーカーのサイズがこれだと物足りないんだということが触ってみると分かってくるんです。シミュレーターについても、本物とまったく同じセッティングなのに同じ音が出なかったりするんですが、実機の音を知っていれば別のアプローチができるし、その追求が面白味にもなります。そういう意味で、アンプを実際に鳴らすのは大切ですね(細川)



▲「LACCO TOWERっぽい音を意識して、ゲインはほぼMAXに近いくらい。1人で弾くとなるともう少しゲインを下げると思いますが、バンドで弾く場合はこのくらいの歪みになります。ただ、そうするとローが膨らんでくるのでベースは抑えめに。また傾向としてドンシャリ気味なんですけど、どこかの帯域が飛び出しているというよりも、なるべくまとまった音になるように作っています。普段から使っているので、リバーブも隠し味程度に掛けました(細川)



リアルな音とシミュレーターの音
両方を知らないことには始まらない

Case-07

玲央
[lynch.]

「最初は家でヘッドフォンをして、あくまでライン上の音しか聴いていなかったんです。でも実際にアンプを鳴らすと音が空気を通して自分の体に飛び込んでくるじゃないですか。なので、ヘッドフォンでは分からない、初めての体感的な音圧を感じられたことが印象的でした。

現在は環境によって実機のアンプとラインの音を使い分けて、ライブではアンプ・シミュレーターを使っているんですよ。でも、その音をキャビネットから出力しているんです。相方の悠介がコンボ・アンプにマイクを立てて録っているので、僕がラインの音だけで音作りをしようとしてしまうとギター2つのニュアンスがズレてしまうし、奥行き感や音圧感、それに同じリフを弾いてステレオ効果を出したいときにもバランスが崩れてしまうんです。だから、キャビから音を出してマイキングしてます。また、レコーディングのときも、必ずマイキングした音とラインの音という2系統に分岐させて、アンプで鳴ったときにどういう風に聴こえているか確認するよ

うにしています。例えばピッキングに対するタッチの強弱は、ラインとリアル・アンプとでは聴こえ方が違っていたりするんですよ。それで、「この音はアンプで鳴らした方が合う」という場合にも対処できるようにしてますね。

以前はアンプ・シミュレーターも今ほど進歩していなかったので手にしない人も多かったと思うんですけど、そういった点で今はリアル・アンプ一択という時代から選択肢が広がったと言えると思うんです。あくまで両方とも進化し続けて共存している中で、どちらが良い悪いではなく、自分が何を選擇するのか。そのためには両方を知っていないとダメなんですよ。シミュレーターも進化していますが、空気を通さないし出せないニュアンスもあるはずなんです。それを知った上で自分はどちらが好きか、自分のバンドにどちらが合っているのかを判断した方がいいと思うので、まずは両方を知らないことには始まらない。絶対にこういったリアル・アンプを鳴らすべきだと思います」(玲央)



▲「常に気にしているのは1弦から6弦までのバランスで、各弦が同じ音量で聴こえるように意識しています。まずミドルを探って一番気持ちいいポイントが決まったら、そのミドルに対してトレブルとベースが同じ音量で聴こえるところを狙う。特に僕のギターは2音半、ないし3音下げだから太い弦を張って、弦の時点でローが付いてくるんです。だからベースの音量感はベースストロークやドラムのキックに対してシビアに調整してるんですよ」(玲央)



アンプ・サウンドには何か1つ
温もりのようなものが乗っかってる

Case-08

悠介
[lynch.]

「最初にアンプを鳴らしたときの第一印象は“歪んでるな”ということでした。それまではチャーッと生音で鳴らしているだけだったので、歪んでる音はCD音源の中でしか聴いたことがなかった。その音を実際に自分の手で出してみたときに“ようやくロックができるな”と思いました。ただ、アンプは手に入れたんですが、その後苦情が来まして(笑)。ヘッドフォンを挿せるタイプのものじゃなかったの、それから鳴らせなくなったんです。その点、最近のアンプは、今回のアンプもそうですがヘッドフォンが挿せるし、外部入力端子まで付いている。曲を聴きながら練習もできますし、何より周りを気にしなくていいのは素晴らしいと思いますよ。

アンプを通して弾くことは練習のモチベーションにも関わってきます。生音のままだと掛けたいエフェクターも掛けられないですしね。もちろんエフェクターに関してはライン出しもできますが、背中を感じられる音圧というのはスピーカーから出る音じゃないと体感できない

し、気持ちをアゲる意味でもアンプは必須。

また大げさな話をすると、ライン上だと音の温もりみたいなものがちょっと感じられないのかな。種類にもよりますが、アンプ・サウンドには何か1つ温もりのようなものが乗っかってるように思います。パソコン上でプレイするスタイルを僕も活用しているのですが否定する気持ちはないんですが、やっぱりギターを手にした人ならアンプで鳴らした音を一度は経験した方がいいと思いますよ。真空管特有の温かみあるサウンドのようにデジタルでは味わえないものが必ずあるので、そこは一度体験して欲しいと思いますね。

ギターはそれぞれ特徴も違いますし、アンプを通したときに本来どういう音がするのかわからないところも鳴らしてみないと分からない。それにピッキングの仕方やニュアンスってことで言っても、アンプを通さないと分からない部分がありますから、読者のみんなには必ずアンプを通してプレイしてもらいたいです」(悠介)



▲「今使っているギターはローが出るので、基本的にベースをあまり上げません。また、ゲインもそれほど上げずにクランチぐらい。歪みすぎるとコード感が分からなくなったりするから、右側側でも調整できるような設定にしています。あとリバーブって掛かっただけで気持ちいいですよ(笑)。もともとエフェクターだと手持ちになって最近になって持つようになったんですけど、使うとやっぱり気持ちいい。なので今回も掛けてみました」(悠介)



最初は一度全部のツマミを全開にしてやっちゃって欲しい

Case-09

Kuboty [TOTALFAT]

「最初にアンプから音を出したときの感動は今も覚えていますよ。ちょうどこのくらいのサイズのアンプだったんですけど、電源を入れたときの最初の設定がクリーン・トーンだったので、音がペンペシ鳴ってマジでびっくりしました(笑)。ディストーション・サウンドがエレキギターの音だと思っていたので、“何だこれは!?”っていう(笑)。でも、そこからドライブのスイッチを入れたら、あのチリチリした感じの歪みが出てきて、それがメッチャ嬉しくて。まあ、ゲインもプレゼンスも全開だったのでシャーシャー鳴ってましたけどね(笑)。

それから家ではミニ・アンプを使って練習してましたけど、その後スタジオでスタック・アンプを鳴らしたときの興奮もハンパじゃなかった。みんなも最初は一度全部のツマミを全開にしてやっちゃって欲しいです。僕もやりました(笑)。っていうか、それしかやったことなかったんです。で、30歳になってからプレゼンスとトレブルを少し削り始めて、最近になってやっ

とベースとミドルをイジるようになりました(笑)。なので、それまでずっとベースとミドルはフルで、トレブルとプレゼンスは12時くらいでした。で、歪みはいつでもフル10。

練習するとき、それが家であってもアンプを使うっていうのは重要なことです。だって、まず歪んだ音はアンプからじゃないと出ないし、クリーン・トーンで弾くにしても、最終的に音に表れる左手のニュアンスや右手のピッキング・トーンが大切なのは変わらないので。あと、何を目標にするかにもよりますが、エレキギターの出音がちょっとでもいい状態で弾きたいじゃないですか。いつかは人前で演奏するかもしれないですしね。そういうときに自分の良い音・良いプレイを届けるっていう意味で言うと、とにかくアンプを通して出た音で練習していくってことは本当に大事なことです。自分のプレイによって出る、右手左手からのこのスピーカーに至るまでの音にすごく意識を持って弾いて欲しいですね」(Kuboty)



▲「トレブルを12時くらいまで上げた段階でシングル・コイルのリア・ポジションに対してピーキーだったので、キンキンしない辺りまで下げました。ベースは、歪ませてブリッジ・ミュートをしたときにローが暴れすぎないところで設定しています。ベースを上げすぎると音がモコモコしてきたりもするし、かと言ってただ削りすぎて過剰な迫力が足りないの、今回は2時くらいがちょうどいいかと思ってセットしました。で、ゲインはもちろんMAX！」(Kuboty)



鳴り方もよく見えるので、ライブの練習にはやっぱりアンプ

Case-10

真館晴子 [The Wisely Brothers]

「アンプを初めて鳴らしたのは自宅だったと思います。特に歪ませることもなく、クリーンで鳴らしました。私の父親はすごくギターが好きなので、小さい頃から身近にアンプがあったんですよ。ただ、そういう環境だったんですけど、初めて鳴らしたのはバンドをやると決めてからでした。今回作ったセッティングよりも小さい音量で、近所迷惑にならない程度に鳴らした記憶があります。

その後、普段からあまりアンプに繋がらず生音でチャカチャカと練習していたんですけど、スタジオとかでアンプを通して音を出してみるとわりと困る部分もあったんです。生音で練習したときにはできてたことも、アンプに繋がるとちょっと違うと感ずるっていうことが実際あるんですよ。最近も思うんですけど、個人練習でもアンプに繋いで練習した方が、家でアンプなしで練習するよりも成果が違うというか。音の鳴り方がよく見えるので、ライブの練習にはやっぱりアンプが必要だなと思っているところです。

あと、私たちは3ピースのバンドなので、3人の音が混ざったときにこういうセッティングにした方がいいというポイントも、実際にアンプを鳴らすことで見えてきたんです。というのも、私が今使っているギターはめちゃくちゃローが出るギターなので、ベースの帯域とぶつかってしまいがちだったんですね。そういう状態からアンプで音を鳴らすうちに、私のギターがどこにいれば良いのが分かってきました。“他の楽器に対して自分の楽器の立ち位置を考えてみる”とか“そもそもどういう音色を出したいか”っていうことは、実際にアンプから音を出してみないと分からないと思います。心地よくクリーンの音を出したいと思って、ギターにしか出せない綺麗な高音を意識してトレブルをイジっているんですが、そういう風に自分のギターを追求していく面白さを感じられるようになると、演奏すること自体もっと楽しくなる。それはアンプと一緒にしなければできないことだと思います」(真館)



▲「歪みペダルも使っているので、アンプはクリーンのまま弾くことが多いです。ミドルを絞っているのは、自分の中でミドル辺りの音にベケツとした印象があって、そこをもう少しマイルドにした音が好きだからなんです。リバーブを少し深めに掛けたのは、3ピースのアンサンブルの中だと音がなくなる間もあつたりするので、そこにある余韻なんかをより楽しめるように掛けていることが多いからです。クリーンでも興行のある音を意識してみました」(真館)



曲作りでアンプを使う／使わないのでは、
また違ったものが出来上がってくる

11

大木伸夫
[ACIDMAN]

「もうずいぶん前のことだけど、アンプを最初に鳴らしたときのことは覚えていますよ。ギターとセットになっていた小さなアンプを自宅で鳴らしましたね。ただ当時は歪みだとかエフェクターだとかって概念がなかったので、“歪む”っていうワードも分かってなかったです。とにかくギターを持っていることに興奮していた。なので、その頃はギターをアンプで鳴らすってこと自体よく分かっていない感じでした。逆にアンプで鳴らすことに気持ち良さを見出したのは、初めてバンドを組んでデカイアンプで歪ませたときですかね。そのときの音量を体感して、“こんなにデカイ音がするんだ”ってずいぶん驚いた思い出があります(笑)。

技術的な話で言うと、アンプから出力するってことは音が増幅されることだから、生音じゃ気付かない音がアンプを通すと鳴っちゃったりするわけですよ。今回は歪ませてないからあまり出てないですけど、粗が目立ちやすいのでしっかり練習になると思います。僕らも自分

たちのスタジオでリハーサルをするときはアンプを実際に鳴らしてて、さらに僕らの場合はその音を録音して確認しているので、細かいところまで追求できてやはり鍛錬にもなっています。

それから、作曲をする上でもアンプは重要な働きをしてくれます。アンプを鳴らすことがイマジネーションに影響してくるんです。もちろん鳴らした方がいいときと、そうでないときはありますけど、それこそリバーブ1つ掛けるだけでもすごく助かるんですよ。受け取る音の雰囲気が変わってくるんです。僕はアンビエント・ミュージックも好きで、逆に生々しいのは好みではなかったりもするので、リバーブがない状態だと全然気分がノッてこないことがある。カラオケで言えばみなさんも使うエコーと同じで、曲を作るときにリバーブを深く掛けておくと雰囲気が変わって何か湧くものもあります。だから曲作りでアンプを使う／使わないのでは、どっちが良い悪いではなく、また違ったものが出来上がってくると思いますよ」(大木)



▲「カッティングっぽく弾こうかなと思ったので、クリアな音を目指しました。なので、今回はクリーン・チャンネルを選び、ミドルとトレブルを少し上げ目にしてあります。また、今回使ったリッケンバックナーに対して少し低音を抑えてあげることで、よりカッチとした音になるようにしました。リバーブは少し掛けたぐらいですが、これがあるのとないのでは全然違いますね。ないやっぱ音が寂しくなりますから、奥行きを出すために僕は掛けてみました」(大木)

11人のサイン入りMarshall MG15Rを1名様にプレゼント!

本特集で使用したアンプはマーシャルの超定番小型アンプ：MG15Rだ。本機に搭載されているEQは「トレブル／ミドル／ベース」と非常に一般的なもので、ボタン1つでクリーン／ドライブ・チャンネルも切り換え可能。このアンプに慣れておくと、バンド練習やライブ本番で使う大型アンプを操作する上でも大きなアドバンテージになるはずだ。

そんなMG15Rで11人がどんな音を作ったのか？是非下記に記したGiGSのYouTubeチャンネルにアップされた運動動画でチェックしてみたい!

さらに、11人がサインを入れてくれた、世界に1台しかないMG15Rをプレゼントすることが決定。以下の応募要項をチェックして、どんどんリツイートしてもらいたい!!



YouTube™ GiGS YouTubeチャンネル [youtube.com/user/GiGSmagazine]

申込受付終了
応募方法

1. GiGSのTwitter [@GiGS_Official]をフォローの上、2. YamahaのK-ONB (けいおん部) [@yamaha_k_onb] かMarshall Japan [@Marshall_Japan]のいずれかをフォローし、
3. 本特集と連動したアーティスト試奏動画ツイートをRTするだけ!

※締切は8月27日24時。当選者の方にはDMでご連絡します。ドンドン応募ください!!